

「調べ学習」とは何か…類型化の試み

研修・支援部 辻村 敬三

はじめに

新しい学習指導要領の完全実施を迎えたこの時期、授業研究や実践発表の場で「調べ学習」という言葉を目にすることが多くなってきた。とりわけ、図書館教育や情報教育、総合的な学習の時間などの分野では、「基礎的・基本的な知識・技能を活用して、課題を解決する」という文脈の中で「調べ学習」という言葉が多く使われているように感じる。ところが、「調べ学習」という言葉が教育の分野で急速に流布していく一方で、「調べ学習」なるものの意味するところや実践の具体的なイメージは、必ずしも鮮明なものとはなっていない。

そもそも私たちは、いつごろから「調べ学習」という言葉を使うようになったのだろうか。小中学校の理科や社会科の中では、この言葉が使われるずっと以前から、実験や調査を通して何かを調べる学習が行われてた。そのときには、「〇〇について調べる学習」という言い方で、学習の対象や“調べる”という学習方法を具体的で分かりやすい言葉で表現していたはずであった。そのような個別具体的な学習活動を「調べ学習」という言葉で一括りにして呼ぶようになったのは、実は、ここ数年のことではないだろうか。

また、現時点での「調べ学習」とは、どのようなねらい、内容をもった学習活動なのだろう。今、書店の教育書コーナーをのぞいてみると、「調べ学習」という言葉をタイトルに冠した本が数多く目につく。また、インターネットで検索してみても、「調べ学習」のノウハウを具体的に伝えるサイトに簡単に行き着くことができる。このような状況の中で、授業改善の“目玉”方策として「調べ学習」を取り入れている小学校が、数多く見受けられる。「活用する力」や「思考力・判断力・表現力」、あるいは「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指した教育改革の流れの中で「調べ学習」が注目を集めるのは当然のことであろう。しかし、私には、「調べ学習」の実践化・授業化に向けた動きが性急なように思えてならない。具体的な方法や教材の使い方を知るとはもちろん重要なことであるが、その一方で、「調べ学習」とは何を目指したどのような学習なのか、今の時点で落ち着いて議論し、共通理解しておくことが必要である。そうでなければ、せっかくの優れた実践も、多くの教室で共有したり互いに交流して高めあったりすることができず、長続きのしない“流行”に終わってしまうことになるだろう。

1 「調べ学習」の現状と問題点

「調べ学習」は、総合的な学習の時間の「探究的な学習」として位置付けられていることが多いが、社会科や理科などの教科の中でも、教科書以外の図書や資料を調べたりする学習活動が様々な形で取り入れられている。これは、「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い」という新しい学習指導要領の趣旨に即した取組であることは言うまでもない。

多くの学校では、それぞれの児童生徒の実態と課題に応じて、様々な工夫をしながら「調べ学習」が行われており、それぞれに着実な成果が上げられている。しかし一方で、ある程度「調べ学習」の実践を進めた学校では、次のステップに向けた充実策を模索する段階で様々な問題や解決すべき課題

が挙げられている。この 1、2 年の管見の範囲でも、次のようなことが「調べ学習」を巡る悩みや課題として挙げることができよう。

- ◇ 資料を調べるのに時間がかかる。
- ◇ 適切な資料がすぐに手に入らない。
- ◇ 資料が見つかったも、児童がそれを読んで理解できない。
- ◇ 情報を調べて書き写すだけになっている。
- ◇ 資料をうまく使ってレポートにまとめたりできない。
- ◇ 本当に子どもの学力向上に役立っているのか、自信が持てない。
- ◇ 大切だと分かっているも、教師の負担が大きくて、なかなか手が出せない。
- ◇ そもそも、「調べ学習」とは、どのような学習なのか、目的や内容、指導方法がよく分からない。

長年、小学校の司書教諭として図書館教育の実践に携わってきた徳田悦子は、これまでの総合的な学習の時間に取り組みされてきた「調べ学習」について、次のような問題点を指摘している。（*①）

- ◆ 児童自らが「なぜ」「どうして」という疑問を持たないまま、探究の課題が受動的に設定されるため、探究型学習のスタートから児童は主体的に取り組めないといった現状が見られる。
- ◆ 資料の収集はできるが、複数の資料を集めたり、その資料が自分の課題を解決するのに適切であるかどうかの評価がなされずに利用するため、課題の見直しや絞り込みが不十分であった。
- ◆ 最も重要な「問題を解決して解答を導き出す段階」が不十分であった。（中略）新しく得た知識を自分で新たに統合して新しい考えを導き出す活動に至っていなかった。
- ◆ コピー学習、パッチワーク学習と言われることもあった。（注）

ここでは、「探求の課題が受動的に設定される」ことや、「資料の収集はできるが・・・」、「新しい考えを導き出す活動に至っていなかった」など、「調べ学習」を実際に進める中で、児童生徒の姿から見えてきた問題点や課題が端的に示されている。これはおそらく、「調べ学習」というものの、真のねらいや全体像がはっきりしないまま、「資料」を「調べる」という部分だけに目をつけて学習活動を組み立てたり、指導したりしてきた結果至った問題状況だと言えよう。「調べ学習」には、児童生徒が資料を実際に集めたり調べたりする前に、またその後にも、なすべき重要な学習活動があるはずなのだが、そここのところが十分練られてこなかったということなのだろう。現在私が、「調べ学習」を巡って感じている様々な問題の原因は、おそらくこの辺りにあるのではないかと考えている。

2 「調べ学習」とは、どのような学習か

(1) 「探究的な学習」の視点から…学習過程

「小学校学習指導要領解説・総合的な学習の時間編」では、探究的な学習の学習過程を次のように設定している。

- ①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識をもつ
- ②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

また、「要するに探究的な学習とは」として、次のように解説している。

要するに探究的な学習とは、物事の本質を探って見極めようとする一連の知的営みのことである。例えば、児童は身近な学習対象（ひと・もの・こと）とかかわって、自分にとって意味や価値のある課題を設定する。その課題について、体験活動をしたり、調べたりしながら、必要な情報を取り出したり集めたりしていく。さらには、得られた幅広い情報を整理・分析したり判断したりしながら、既習の知識や経験と結び付けていく。こうして生み出された自分の考えや意見、発見したことなどをまとめ、表現する。それを他者と交換し合い、自らの考えや意見を更新したり、協同して実践に移したりしていく。こうした知的な営みが有機的につながって発展的に繰り返されていくことが望まれている。

つまり、探究的な学習というのは、児童自身が【課題を設定】し、様々な手立てを講じて【情報の収集】を行い、集めた情報を【整理・分析】して思考し、自分の考えとして【まとめ・表現】する活動、ということになる。

これを見ると、現在多くの学校で行われている「調べ学習」と、目標や学習の進め方の点で重なる部分が多いことが分かる。ただし、学習指導要領の中では「調べ学習」という言葉は使われていないし、「調べ学習」＝「探究的な学習」というとらえ方も、明示されたものではない。というよりも、「探究的な学習」という一連の学習活動の一部として調べる学習、すなわち「調べ学習」を位置づけていると考えた方がいいだろう。そのようなことを了解した上で、【課題を設定】、【情報の収集】、【整理・分析】、【まとめ・表現】という「探求的な学習」の学習過程が、「調べ学習」の主軸ともなるものであることを確かめておきたい。

(2) 「情報教育」の視点から…「調べ学習」で育てたい能力

「調べ学習」について、その中でどのような能力を身に付けさせようとしているのかを考える上で、多くの示唆を得る視点がもう一つある。それは、「情報教育」である。

小学校学習指導要領では、「情報教育」について、次のように規定されている。

- (9) 各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。（総則第4章 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項）

一見すると、ここで示されている「情報教育」は、コンピュータ等の情報手段に慣れることと、情報モラルを身に付けることと、といった狭い意味でとらえられているように感じられる。だが、「適切に活用できる」ということの意味について、小学校学習指導要領解説・総則編では、次のように詳しく説明されている。

すなわち、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段の活用にあたっては、小学校段階ではそれらに慣れ親しませることから始め、キーボードなどによる文字の入力、電子ファイルの保存・整理、インターネットの閲覧や電子メールの送受信などの基本的な操作を確実に身に付けさせるとともに、文章を編集したり図表を作成したりする学習活動、様々な方法で文字や画像などの情報を収集して調べたり比較したりする学習活動、情報手段を使って交流する学習活動、調べたものをまとめたり発表したりする学習活動など、情報手段を適切に活用できるようにするための学習活動を充実することが必要である。（小学校学習指導要領解説・総則編 第3章 教育課程の編成及び実施 9 *ゴシック表記は引用者）

これを見ると、情報教育で言う「情報手段を適切に活用できる」とは、単にスキルを身に付けたり、器用に使いこなせるといったことではなく、先に述べた探究的な学習の在り方と基本的に重なっていることが分かる。すなわち、「文章を編集したり図表を作成したり」、「情報を収集して調べたり比較したりする」、「調べたものをまとめたり発表したり」といった学習活動を含んだものとして「適切に活用できる」能力ととらえているのである。学習指導要領では、「情報活用能力」という言葉は、直接使われていないが、情報を適切に活用する、という文脈から、「情報活用能力」という言葉を使うことが妥当であろう。また、解説総則編には、「児童が主体的に情報を活用できるように」すること、「コンピュータの基本的な操作」を身に付けること、「情報モラル」を身に付けること、の3つを「情報活用能力」という言葉でまとめている。そこで、我々は、「調べ学習」の中で育てたい力を言うとき、その基本的な在り方と内容を含んだ上で、「情報活用能力」という言葉を使っていくことが妥当であろう。

なお、「情報活用能力」にかかわって、全国学校図書館協議会では、1992年に「資料・情報を活用する学び方の指導」（利用指導）体系表を発表し、それを2004年に改訂、発表し、2008年には解説編を発行している。（*②）この体系表では、情報活用能力を育成するために指導すべき内容を4つの領域に構成し、小学校低学年から高等学校まで、発達段階に合わせた系統化を図っている。4つの領域は、メディアそのものの特性などの理解、メディアから情報を得るための具体的な方法、情報を整理して思考する方法、学習成果をまとめて発表する方法、といったことを中心として構成されている。情報活用能力育成に関わる指導体系として、基本となるものである。

また、この他にも、「情報活用能力」については、情報教育の研究分野の内外で様々な識者や実践者が、「メディア活用能力」（大串夏身・志村尚夫 他）（*③）、「情報活用能力」（設楽敬一）（*④）、「情報リテラシー」（堀田龍也・塩谷京子、鎌田和宏）（*⑤）などの言葉を当てて論じている。これらの言葉は、「情報」というものを図書資料だけに限らずコンピュータ等から得られる幅広いものを含んでいることと、探究的な学習の考え方に沿った「情報の活用」を意図している点で、共通していると考えられる。これらも、大枠では、「調べ学習」の中で求められる「情報活用能力」として扱っても問題はないと考えている。

(3) 「図書館教育」の視点から…学習指導過程（プロセス）

調べ学習あるいは探究型の学習については、図書館教育をはじめ、総合的な学習の時間や情報教育で多くの実践が試みられており、その学習過程も様々に工夫されている。次に示すものは、大串夏身が図書館教育の分野で開発した「課題探求の6つのプロセス」である。

- ① 探求すべき課題を明らかにする
自分の関心や問題に気づき、具体的な探究課題を明らかにし、探究過程の見通しを立てる。
- ② 情報探索の方策を考える
課題を探求するためにどのような情報が必要か、どのような情報源から情報を集めるか、その情報源をどのようにさがせばいいか、といった情報探索の方策を考える。
- ③ 情報源を探し、資料を収集する
どこに、どのような情報源があるかをさがし、適切な情報源を選んで手に入れる。ここでは、分類や目録、書誌、索引などを使う文献探索のスキルが必要になる。
- ④ 資料から必要な情報を取り出して記録する
集めた情報源のなかから必要な情報を見つけ出して、使いやすいかたちで記録する。
- ⑤ 情報を活用する
集めた情報を比較検討し整理して、それをもとに自分の考えをまとめて発表し、ほかの人と意見を交換する。
- ⑥ 課題探求のプロセスとその成果を評価する
課題の設定から情報の収集と活用に至るまでの課題探求のプロセスを振り返り、まとめたレポートや発表などの成果を評価して、今後の探究に役立てる。 (*⑥)

ここに示された内容は、中学校から高等学校段階を主な対象としているが、課題の設定から発表まで、児童がどのような手順を踏んで、情報を活用し自ら考え、その成果を発表していくのか、おおよその見通しを持つことができる。

「調べ学習」では、調べたり考えたりする活動を、他にもない児童自身が展開していくことがもっとも重要なことである。この学習指導過程では、充実した「調べ学習」を進めるためには、児童に何を、どのような手順でさせていけばいいのかに視点が据えられている。何かを教えるのではなく、学習活動を連続的に組み立てることで、その活動を通して児童自身が何かを理解したり、スキルを身に付けたりすることをねらったものである。そこに、まず、活動のプロセスに目を向け、重視することの意味がある。

もう一つ重要なのは、この6つの順序性である。この6つのプロセスは、①から順に積み重ねていかなければならない性質のものである。具体的な活動をイメージしてみても、順序を入れ換えること、ほとんど無理なことはすぐに分かる。例えば、④の「情報を取り出して記録する」ためには、③の「情報を収集する」ことがなければ、実現不可能である。さらに、順序性のもう一つの側面として、①から⑥の活動が互いに関連しあい、前の活動が次の活動を下支えしているということにも重要なポイントがある。これはつまり、①から⑥の各プロセスが充実していなければ、“探究的な調べ学習”のスムーズで価値のある流れが断ち切られてしまうということである。現在、調べ学習の問題点としてあげられていることの多くは、こういった学習プロセスの不理解あるいは軽視から来ているのではない

かと、私は、考えている。

3 類型化による「調べ学習」の実践推進方略

(1) 「調べ学習」実践上の課題

ここまで、「調べ学習」のねらいや内容を「探究的な学習」のそれとほとんどイコールのものとして考えてきた。だが、この考え方だと、実際の公立小学校での実践をかえって阻害してしまう危険性がある。

その要因の一つは、「探求的な学習」として求められているような学習活動が、本当に実現可能なものかという不安、もしくは指導者側の自信のなさにある。探求的な学習を実現する場として設定された「総合的な学習の時間」に於いてでさえ、先に示したような「6つのプロセス」を備え、「情報活用能力」を発揮させるような学習活動は、そう簡単に実現できていないというのが現実であろう。また、指導者が学習過程を整えてきちんと準備したとしても、資料を読んだり、発信したりする「情報活用能力」が児童の側に十分身に付いていない状態では、充実した学習活動が展開できないのではないかという否定的な見方も当然であろう。目指すところがいきなり身の丈以上のところに設定されてしまうことへの不安が実践の取りかかりを躊躇させることになるのではないだろうか。

もう一つは、現在、教科の学習の中で行っている、資料を調べたり取材したりしている学習活動の目標を大きく引き上げてしまうということである。後で詳しく述べることになるが、現在、小学校では、様々な形で「調べ学習」が行われている。それらの中には、教科書に掲載されたグラフや写真などを資料として調べたりするだけの「調べ学習」や、ある事柄について学級で分担して調査したりする「調べ学習」も含まれている。その中には、先に示した6つのプロセスは、全部揃っているわけではない。また、課題意識や見通しについても、十分でないまま、指導者の方向付けの基に進められていることも多い。そういう状況であっても、「調べ学習」として学習活動を進めているというのが実際のところであろう。然るに、このような状況を「調べ学習」＝「探求的な学習」とする考え方で見ると、“不十分なもの”となってしまう。これまでやってきた「調べ学習」は、本来の意味での「調べ学習」ではない、と断じられてしまうことになるのである。現在行っている学習や指導の否定が、学習者、指導者両方の意欲を削いでしまうことになるのではないだろうか。

小学校の現場で「探求的な学習」を明日にでもすぐ実現することは、そうたやすいことではない。指導者の側に十分な理解や指導力量が備わっていないこともあるし、児童の側に主体的に学習を進めるだけの諸能力が育てられていないという現実がある。そこで、「探求的な学習」を本来あるべき姿として認識しつつ、中・長期的な目標として設定して少しずつ実現していこうというのが、実際のところではないだろうか。そういう状況の中で、「探求的な学習」と呼べるものになっていなければ、「調べ学習」とは認められない、というふうに考えてしまえば、最初の一步を踏み出すことがとても難しくなってしまう。それよりも、教科学習の中で調べさせることも、課題を方向付けて調べさせたりすることも、「調べ学習」の一つの形として認めていくことが必要だと思う。理想としての目指すべき「調べ学習」をはっきりさせつつ、実践の上では、手の付けられるところから無理なく始めていこう、というのが現実的な方法であろう。必要なことは、どのようなことをどのような手順で進めていくべきか、小さなステップに分けて整理し、長いスパンの下に確かな見通しを持つことであろう。

そこで、本稿では、「調べ学習」を体系化する上で基盤となるものとして、小学校等で現在すでに

実施されている多様な「調べ学習」を、「探求的な学習」を視点としつつ、実態に即しながらとらえ直し、3つの類型として示してみたい。

(2) 小学校で行われている「調べ学習」の3つの類型

教育課程の枠組から見ると、「調べ学習」は、国語や理科などの教科の中で行われるものと、総合的な学習の時間の中で行われるものの2つに大別することができる。ただし、この観点では、学習の場や位置付けは区別できても、「調べ学習」でめざす学力や学習活動の在り方など、本質的な要素は照射されてこない。「調べ学習」とは何かという問いに答えるためには、何を目的として、どのようなことを、どのように調べるのかといった実際の学習活動に即した観点に基づいた分析・分類が求められる。

そこで本稿では、現在小学校で行われている「調べ学習」を次のように「スキル習得型調べ学習」「発展型調べ学習」「探究型調べ学習」の3つに類型化して整理する。

【スキル習得型調べ学習】

教科の学習の中で、児童自身が必要なことを調べる学習活動である。「調べる」ための個別スキル習得を重視する。

この型の「調べ学習」は、社会科や理科などの教科の単元に“調べる”活動が組み込まれた形で進められる。例えば、社会科で言えば、食料生産に関する単元の中で「わたしたちの食生活は、どのように変わってきたのでしょうか。」を学習課題として、グラフや本を探したり、家族にインタビューしたりするなどの学習活動を行う場合である。ここでは、教師が教科の学習として組み立てた活動(単元構成)のある段階で“調べる”活動が組み込まれる。何について調べるのか(課題)と、何を調べるのか(情報源)は、児童に考えさせる形を取るが、実際には、教科の内容としてあらかじめ決められており、学習過程の上では特に重視されていない。

重要なことは、単元の学習に必要な情報を自分で“調べて”手に入れるためのスキルを体験的に学ばせるところにある。そのために教師は、グラフの読み取り方や、インタビューした結果のまとめ方などについて、明解かつ丁寧な指導を行わなければならない。児童は、教師から丁寧な手ほどきを受けながら“調べる”活動を進め、その中で基本的なスキルを身に付けていくことができる。また、そこで得た情報を実際にその後の学習に活用していくことで、“調べる”ことの有用性を体験を通して実感することになる。これもまた、この型の「調べ学習」の重要なねらいの一つである。

この型は、後で述べるような、児童生徒が自ら課題を選んで自力で調べる「探究型」と比べると、児童生徒の主体性や活動のダイナミックさからすれば、「調べ学習」と呼ぶには限定的で部分的に過ぎるという印象を与えるかもしれない。しかし、私は、小学校の段階では、特にこのような学習活動も「調べ学習」の一つの段階として重要であると考えている。それは、児童生徒自らが課題を見つけて様々な情報活用能力を駆使して進めていくような“めざすべき”「調べ学習」の基本型ともなり、基礎的なスキルを習得する場ともなる大切な学習であると考えからである。そのような趣旨を込めて、「スキル習得型調べ学習」と呼ぶことにする。

【発展型調べ学習】

児童生徒が興味や問題意識を持った課題について調べて、その結果をレポートなどにまとめて発表する学習活動である。国語科や社会、理科などで、単元の学習が一通り終わった後に「チャレンジし

てみよう」「調べてみよう」などのタイトルを冠して行われる発展学習などがこれに当たる。身に付けた「調べる」スキルを活用させることと、課題を解決する過程を児童自身の意欲と力で主体的に進めさせることを重視する。

この型の「調べ学習」では、課題設定から調査活動、まとめ、発表までの一連の流れが、教科書の内容とはいったん区切ったところから、発展的な内容として進められることが多い。また、学習活動に必要なスキル（資料を調べたり発表資料を作成したりする技能）は、すでに身に付けられているという前提で進められる。そのため、スキルの習得そのものに時間を割くことは少なく、教師は、児童の学習活動を“見守る”あるいは、“サポートする”姿勢で関わることになる。この点で、前述した「スキル習得型調べ学習」と違い、教師の指導内容よりも児童の主体性の方にやや軸足が移った学習活動であると言える。

ただし、教科の学習として行われる限り、学習活動の課題や方法などは、単元の学習内容や目標によって、あらかじめ方向付けられている。方向付けるといっても、「スキル習得型調べ学習」のように「食料品別の輸入量の変化を調べよう」、「春の生き物のようすを観察しよう」など、対象や資料まで限定的に指定することではない。国語科などで説明的な文章を読んだ後で「食べ物と私たちの暮らしについて、興味を持ったことを調べてみよう。」などと、分野や領域、問題意識、目の付け所などを決めておいて、その枠の中で調べる課題を選択していくといった方法である。このことによって児童は、単元前半で学んだ内容を知的な基盤として、自分自身の問題意識を醸成し、教科の目標や内容に即した学習活動を展開することができる。このような趣旨から、教科の学習内容の枠内で、身に付けたスキルを活用して、発展的な内容に主体的に取り組む「調べ学習」を「発展型調べ学習」と呼ぶことにする。

【探究型調べ学習】

「発展型調べ学習」の学習課題の設定は、教科の枠内であらかじめ方向付けられ、児童がその中から選択するという形で行われていた。これに対して、総合的な学習の時間に行われる「調べ学習」では、教師が方向や分野などを細かく規定せず、児童自身が“課題を見つけ”ることが理想とされる。総合的な学習の時間の場合、課題設定は、何について調べるかを定めるだけでなく、児童生徒がどのような問題意識を持ち、解決へ向けた見通しをどの程度まで持っているのか、どれぐらい自分自身の問題としてとらえているのかということに目を向けることが求められる。この学習活動では、課題の設定過程そのものが重要な学習要素であり、学習活動全体の学びの質を左右する決定的に重要な意味を持ってくるのである。総合的な学習の時間では、このような学習活動を「探求的な学習」と呼んでいるが、「調べ学習」について考察する文脈の上では、「発展型調べ学習」と区別するために「探求型調べ学習」と呼ぶことにする。

「探求型調べ学習」では、課題設定後の学習活動は「発展型調べ学習」と基本的な違いはない。児童は、自分の興味や問題意識に基づいて設定した課題について、自分の力で調べて、そこで得た情報を整理して自分なりの新しい考えを生み出し、それを人に伝えるために分かりやすく表現し、互いに学びあっていく、そのような一連の学習活動である。ただし、教科の枠がない分、調査の範囲はより広くなり、その中で出会う情報や事象、社会的な営みなどは、未整理なままの多様な様相を見せることになる。児童には、それらを正しく理解し、自分なりの意味付けを施した上で整理していく力が求められる。それだけに、活動がよりダイナミックになる分、児童に求められる情報を整理活用する能力は、より高いものが求められる。

4 今後の展望

このように「調べ学習」を類型化することには、二つのねらいがある。

一つは、小学校等で現在すでに実施されている多様な「調べ学習」について、実態に即しながらそれぞれの特色をとらえ現状認識を確かにすることである。その上で、「探求的な学習」を目指す姿として据えて、それに至るステップとしてそれぞれの実践を、現時点で正しく意味付けることである。そのことにより、今ある実践を有効に生かした取組の展開が期待できるからである。そのために今後、各類型の実践例に即して、指導のあり方や児童に身に付けさせたい具体的な能力などを検討していくことが必要であろう。

もう一つのねらいは、類型化することにより、実践の場を多様にするることである。学習指導要領が求める「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力」を身に付けさせることは、一つの教科、あるいは総合的な学習の時間だけでできることではない。様々な教科の1時間の授業の中で、あるいは単元の一部として多様な「調べ学習」に取り組むことにより、児童は「探求的な学習」を主体的に進めるための能力を、少しずつ重ねるように身に付けることができる。今後は、3つの類型相互の関連を明確にした「調べ学習」全体の体系化と、発達段階を縦軸に加えた系統性を明確にしていくことが必要であろう。

「調べ学習」における評価と観点の方法に関する検討と併せて今後の課題としたい。

<注>

- ・ここでは、文脈上「パッチワーク」を否定的な意味で使用しているが、手芸技法あるいは伝統文化としての「パッチワーク」を批判したものではない点、注意を要する。

<引用文献>

- *① 「小学校における学び方の指導 探究型学習をすすめるために」 徳田悦子 全国学校図書館協議会 2009.10
- *② 「情報を学習につなぐ 情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」 全国学校図書館協議会 編 全国学校図書館協議会 2008.5
- *③ 「学習指導…調べ学習と学校図書館 改訂版」 大串夏身編著 青弓社 2009.8
- *④ 「学校図書館の活用名人になろう」 設楽敬一(全国学校図書館協議会)
- *⑤ 「学校図書館で育む情報リテラシー」 堀田龍也・塩谷京子編 全国学校図書館協議会 2007.7
- *⑥ 前掲「学習指導…調べ学習と学校図書館 改訂版」 大串夏身編著 青弓社 2009.8

<参考文献>

- * 「学校図書館を活用する学び方の指導」 宅間紘一 全国学校図書館協議会 2002.7
- * 「教室・学校図書館で育てる 小学生の情報リテラシー」 鎌田和宏 少年写真新聞社 2010.6
- * 「探究型学習に取組もう 学校図書館の活用名人になる」 全国学校図書館協議会編 全国学校図書館協議会 2010.3
- * 「思考力・判断力・表現力が育つ学校図書館活用の新しい授業」 植松雅美 学事出版 2010.4